

イエスさまのように 認め合い、仕える子どもを目指して



巻頭言 校長 臼井浩一

惜しまず豊かに蒔く人は
刈り入れも豊かなのです。

明けましておめでとうございます。昨年は色々ご支援、ご協力をありがとうございました。本年もどうぞよろしくお願い致します。

今日から三学期が始まりました。いよいよ一年のまとめの学期であり、同時に次の学年へ向けて心と生活、学びの姿勢を整える大切な学期です。一日一日をどのような思いで過ごすかが、次の学年、そしてこれからの歩みに大きく影響していきます。

1月の暗唱聖句は、「**たゆまず善を行いましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取ることにになります**」(ガラテヤ6:9)です。

日々の努力や親切、祈りや励ましは、すぐに目に見える結果として現れないこともあります。しかし、神様は私たちの小さな善の種を必ず覚えてくださり、ふさわしい時に豊かな実りとして返して下さいます。

沖縄三育小学校で当てはめると本校の大きな特長の一つであるファミリー活動(上級生が下級生を思いやり、下級生が上級生に憧れと感謝を抱く関係は、本校の大切な宝)がそれになります。

3月に入り各学年が「6年生を送る会」をする頃になると、これまで優しく声を掛けてもらい、助けてくれた6年生がいよいよ卒業するのだという実感がわき、悲しくて涙を流す1年生の姿を見ることがあります。その姿は、6年生が日々、善を惜しまず、蒔いてきた証といえるでしょう。一方で、忙しさや照れ、あるいは「まだ大丈夫だろう」など様々な理由や気持ちがあるのだと思いますが、下級生への関わりを十分に持たないまま、卒業の時期を迎えてしまった6年生がいたこともあります。

校訓 「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもその通りにせよ。」

以前、私は1年生を担当していた時期があるので、その6年生が1年生からどのように見られていたのかよく分かりました。3学期は卒業バイブル週間で6年生にメッセージカードを書いたり、6年生を送る会でお手紙を書いたりすることがあるのですが、沢山関わりを持ってきていた6年生には、「給食をこぼしたとき片付けてくれてありがとう。」とか「休み時間にたくさん遊んでくれてありがとう。」等々…沢山の思い出や感謝の言葉が書かれます。一方で「この6年生のお世話になったことないから何も書けない…」と言われてしまう6年生もいました。卒業の時期に1年生から「お世話になりました。」という感謝の思いを十分に感じてもらえていない6年生は、どこか寂しさを感じていたのではないのでしょうか。

三学期は、6年生にとっては「どのような最上級生でありたいか」を実践できる最後の学期です。在校生にとっては、次の学年でどのような上級生になりたいのかを具体的に考え、行動に移しはじめる準備の学期です。小さな声掛けや関わり、手助けであっても、それは確かな善の種を蒔くことになります。ひとり一人にはこの三学期、あきらめずに善の種を蒔き続けてほしいと思います。

今学期も学校と家庭が共に祈り、一致しながら子どもたち一人ひとりが豊かに種をまき、感謝と愛に満ちた実りを共に分かち合える3学期となることを願っています。

「少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。」

コリントⅡ9:6

～始業式の話から～